東下り

（第九段）

要旨

昔、都を捨てて友人とともに東国に下った男がいた。その旅の途中、三河の国八橋、駿河の国宇津の山、武蔵の国隅田川などで、旅情や都の人への思慕の念を歌に託して詠んだ。

構成

段落	ページ・行	段意
第一	初め～P六一・11〈ほとびにけり。〉	ある男が、安住の地を求めて東国に旅立ち、やっと三河の国の八橋にまでたどり着いた。そこで「かきつばた」の折句に旅情を託して詠み、一行も同じ思いに泣いた。
第二	P六一・12〈行き行きて〉～P六二・7〈塩尻のやうになむありける。〉	さらに東へ進み、駿河の国の宇津の山を越えてゆくとき、修行者に出会い、それに都への文を言づけた。また、初めて見る富士山に驚き、歌に詠んだ。
第三	P六二・8〈なほ行き行きて〉～終わり	さらに進んで隅田川に着いた。舟に乗るときに都鳥を見て、いよいよ都を恋しく思うあまり歌を詠んだ。一行も同じ思いに泣いた。

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

①昔（むかし）、男（をとこ）　あり　けり。　②その　男（をとこ）、　身（み）を　要（えう）なき　ものに

ラ変・用｜過・終　　代　　格助・体修　　格助・対象　　形ク・体　　格助・資格

①昔、ある男がいた。②その男は、我が身を必要のない人間と思い込んで、

思ひなして、京には、あらじ、東の方に
サ四・用｜接助・単接｜格助・場所｜係助・区別｜ラ変・未｜打意・終｜格助・体修｜格助・方向

住むべき国求めにとて行きけり。③もとより友と
マ四・終｜適・体｜マ下二・用｜格助・目的｜格助・引用｜カ四・用｜過・終｜副｜格助・資格

する人、ひとりふたりして行きけり。④道知れる人も
サ変・体｜格助・相手｜カ四・用｜過・終｜ラ四・已｜存・体｜係助・同類

なくて、惑ひ行きけり。⑤三河の国八橋といふ所に
形ク・用｜接助・理由｜カ四・用｜過・終｜格助・引用｜八四・体｜格助・帰着

至りぬ。⑥そこを八橋といひける は、水行く川
ラ四・用｜完・終｜代｜格助・対象｜格助・引用｜八四・用｜過・体｜係助・提示｜カ四・体

の蜘蛛手なれば、橋を八つ渡せる に より
格助・主格｜断・已｜接助・順理｜格助・対象｜サ四・已｜存・体｜格助・対象｜ラ四・用

て なむ、八橋と いひける。⑦その沢のほと
接助・単接｜係助・強意(係)｜格助・引用｜八四・用｜過・体(結)｜代｜格助・体修

りの木の陰に下りゐて、乾飯食ひけり。
格助・体修｜格助・場所｜ラ上二・用｜ワ上一・用｜接助・単接｜八四・用｜過・終

⑧その沢に、かきつばた いと おもしろく 咲きたり。⑨それ
代｜格助・体修｜格助・場所｜副｜形ク・用｜カ四・用｜存・終｜代

を見て、ある人の いはく、「かきつばた、と いふ
格助・対象｜マ上一・用｜接助・単接 連｜格助・主格｜格助・引用｜八四・体

五文字を句の上に据ゑて、旅の心を
格助・対象｜格助・体修｜格助・場所｜ワ下二・用｜接助・単接｜格助・体修｜格助・対象

詠め。」と言ひければ、詠める。
マ四・命｜格助・引用｜八四・用｜過・已｜接助・順理｜マ四・已｜完・体

都にはいるまい、東国の方に住むのによい国を探しに（行こう）と考えて出かけて行った。③以前から友としている人、一人二人とともに行った。④道を知っている人もいなくて、迷いながら行った。⑤三河の国の八橋という所に着いた。⑥そこを八橋といったのは、水の流れる川が蜘蛛の足のように（幾筋にも）分かれているので、橋を八つ渡してあることによって、八橋というのであった。⑦その沢のほとりの木の陰に（馬から）下りて座って、乾飯を食べた。⑧その沢に、かきつばたがとても美しく咲いている。⑨それを見て、ある人が言うことには、「かきつばた、という五文字を和歌の各句の頭に置いて、旅の心を詠め。」と言ったので、（男が）詠んだ（歌）。

⑩から衣　着　つつ　なれ　に　し　つま　し　あれ　ば
（枕）　カ上一・用　接助・反復　ラ下二・用　完・用　過・体　副助・強意　ラ変・已　接助・順接

はるばる　き　ぬる　旅　を　し　ぞ　思ふ
副　カ変・用　完・体　格助・対象　副助・強意　係助・強意（係）　八四・体（結）

と　詠め　り　けれ　ば、　みな人、　乾飯　の　上　に　涙
格助・引用　マ四・已　完・用　過・已　接助・順接　格助・体修　格助・場所

落とし　て、　ほとび　に　けり。
サ四・用　接助・理由　バ上二・用　完・用　過・終

⑪行き　行き　て、　駿河の国　に　至り　ぬ。　⑫宇津の山　に
カ四・用　カ四・用　接助・単接　格助・帰着　ラ四・用　完・終　格助・帰着

至り　て、　わが　入ら　む　と　する　道　は、　いと
ラ四・用　接助・単接　代　格助・主格　ラ四・未　意・終　格助・引用　サ変・体　係助・提示　副

暗う　細き　に、　蔦、楓　は　茂り、　もの心細く、　すずろなる　め
形ク・用（ウ音）　形ク・体　格助・添加　係助・提示　ラ四・用　形ク・用　形動ナリ・体

を　見る　こと　と　思ふ　に、　修行者　会ひ　たり。　⑬「かかる
格助・対象　マ上一・体　格助・引用　八四・体　接助・単接　八四・用　完・終　連

道　は、　いかで　か　いまする。」　と　言ふ　を　見れ
係助・区別　副　係助・疑問（係）　サ変・体（結）（尊）修行者→男　格助・引用　八四・体　格助・対象　マ上一・已

ば、　見　し　人　なり　けり。　⑭京　に、　その　人　の
接助・順偶　マ上一・用　過・体　断・用　詠・終　格助・場所　代　格助・体修

御もと　に　とて、　文　書き　て　つく。
格助・対象　格助・引用　カ四・用　接助・単接　カ下二・終

⑮駿河　なる　宇津の山べ　の　うつつ　に　も　夢　に
格助・対象　在・体　格助・体修　格助・場所　係助・列挙　格助・場所

⑩から衣…衣服が着ているうちに萎れるように、馴れ親しんだ妻が（都に残って）いるので、はるかに遠くまでやって来た旅をしみじみと思うことだ。

と詠んだので、皆、乾飯の上に涙を落として、（乾飯が、水にもどす必要のないほどに）ふやけてしまった。

⑪どんどん進んで行って、駿河の国に着いた。⑫宇津の山に着いて、自分が分け入って行こうとする道は、とても暗く細いうえに、蔦や、楓が茂り、何となく心細く、思いがけなくつらい目に遭うことだと思っていると、修行者が（この男たちに）出会った。⑬「このような道に、どうしていらっしゃるのですか。」と言う修行者を見ると、（都で）見知った人であったよ。⑭都に、あの恋しい人のお手もとにと思って、手紙を書いて（修行者に）言づけた。

⑮駿河なる…私は駿河の国にある宇津の山に着いたが、「うつ」と

も　人に　あはぬ　なり　けり
係助・列挙　格助・対象　八四・未　打・体　断・用　詠・終

⑯富士の山を　見れ　ば、　五月の　つごもり　に、　雪
格助・対象　マ上一・已　接助・順偶　格助・体修　格助・時間

いと　白う　降れ　り。
副　形ク・用(ウ音)　ラ四・已　存・終

⑰時　知ら　ぬ　山は　富士の嶺　いつ　とて　か　鹿の子まだ
ラ四・未　打・体　係助・提示　代　格助・引用　係助・疑問(係)

ら　に　雪の　降る　らむ
格助・状態　格助・主格　ラ四・終　現原推・体(結)

⑱その　山は、　ここ　に　たとへ　ば、　比叡の山を
代　格助・体修　係助・提示　代　格助・場所　八下二・未　接助・順仮　格助・対象

二十　ばかり　重ね上げ　たら　む　ほど　して、　なり　は　塩尻の
副助・程度　ガ下二・用　完・未　婉・体　格助・手段　係助・区別　格助・体修

やうに　なむ　あり　ける。
比・用　係助・強意(係)　補動・ラ変・用　過・体(結)

⑲なほ　行き　行き　て、　武蔵の国と　下総の国と　の　中
副　カ四・用　カ四・用　接助・単接　格助・並列　格助・並列　格助・体修

に、　いと　大きなる　川　あり。　⑳それ　を　すみだ川と　いふ。
格助・場所　副　形動ナリ・体　ラ変・終　代　格助・対象　格助・引用　八四・終

㉑その　川の　ほとり　に　群れゐ　て、　思ひやれ　ば、
代　格助・体修　格助・場所　ワ上一・用　接助・単接　ラ四・已　接助・順偶

限りなく　遠く　も　来　に　ける　かな、　と　わび合へ　る
形ク・用　形ク・用　係助・強意　カ変・用　完・用　詠・体　終助・詠嘆　格助・引用　八四・已　存・体

名の付く現にも夢にもあなたに逢わないことだなあ（もうあなたは私のことは思っていてくれないのだろうか）。

⑯富士山を見ると、五月の末に、雪がとても白く降り積もっている。

⑰時知らぬ…時節をわきまえない山は富士山だ。いったい今をいつと思って、あんなに鹿の子まだらに雪が降り積もっているのだろう。

⑱その山は、都で例えるならば、比叡山を二十ほど積み上げたくらいの高さで、形は塩尻のようであった。

⑲さらにどんどん進んで行って、武蔵の国と下総の国との間に（来ると）、とても大きな川がある。⑳それを隅田川という。㉑その川のほとりに集まって腰を下ろして、（都を旅立ってからの日数・行程を）思いやると、途方もなく遠くまでやって来たものだなあ、と互いに嘆き合っていると、渡し守が、

に、　渡し守、「はや　舟に　乗れ。日も　暮れ　ぬ。」と
接助・単接　副　格助・対象　ラ四・命　係助・同類　ラ下二・用　強・終　格助・引用

言ふ　に、　乗り　て　渡ら　む　と　する　に、　みな人
八四・体　接助・順理　ラ四・用　接助・単接　ラ四・未　意・終　格助・引用　サ変・体　接助・逆確

ものわびしく　て、　京　に　思ふ　人　なき　に　しも　あら　ず。
形シク・用　接助・単接　格助・場所　八四・体　形ク・体　断・用　副助・強意　補動・ラ変・未　打・終

㉒さる　折　しも、白き　鳥　の、嘴　と　脚　と　赤き、鴫
連　副助・強意　形ク・体　格助・同格　格助・並列　格助・並列　形ク・体

の　大きさ　なる、水　の　上　に　遊び　つつ　魚　を
格助・体修　断・体　格助・体修　格助・場所　バ四・用　接助・反復　格助・対象

食ふ。㉓京　に　は　見え　ぬ　鳥　なれ　ば、みな人　見知ら
八四・終　格助・場所　係助・区別　ヤ下二・未　打・体　断・已　接助・順理　ラ四・未

ず。㉔渡し守　に　問ひ　けれ　ば、「これ　なむ　都鳥。」と
打・終　格助・対象　八四・用　過・已　接助・順偶　代　係助・強意　格助・引用

言ふ　を　聞き　て、
八四・体　格助・対象　カ四・用　接助・単接

㉕名　に　し　負はば　いざ　言問はむ　都鳥　わが
格助・資格　副助・強意　八四・未　接助・順仮　感　八四・未　意・終　代　格助・主格

思ふ　人　は　あり　や　なし　や　と
八四・体　係助・提示　ラ変・終　係助・疑問　形ク・終　係助・疑問　格助・引用

と　詠め　り　けれ　ば、　舟　こぞり　て　泣き　に　けり。
格助・引用　マ四・已　完・用　過・已　接助・順理　ラ四・用　接助・単接　カ四・用　完・用　過・終

「早く舟に乗れ。日も暮れてしまう。」と言うので、（舟に）乗って（川を）渡ろうとするのだが、皆は何となく悲しくて、（それは）都に恋しく思う人がいないわけでもない（からであった）。㉒ちょうどそのとき、白い鳥で、嘴と脚とが赤い、鴫の大きさである鳥が、水の上に動き回って魚を食っている。㉓都では見かけない鳥であるので、皆見て分からない。㉔渡し守に聞くと、「これが都鳥だよ。」と言うのを聞いて、

㉕名にし負はば…都鳥という名にふさわしいのならば、さあ尋ねてみよう、都鳥よ。私が恋しいと思う人は無事でいるかどうかと。

と詠んだので、舟の中の人は皆泣いてしまった。

学習活動のポイント

学習活動のポイント

❶「東下り」を音読する。思判表B(1)ア

❷重要古語の意味・用法を確認する。知技(1)ウ・(2)ウ

↓「言葉と表現」1

❸現代語訳し、段落ごとに内容を確認する。知技(1)エ・(2)イ 思判表B(1)イ

↓「学習のポイント」1

❹「から衣」「駿河なる」の歌の修辞を確認する。知技(1)アオ・(2)エ

展開

❶最初に全文を通して音読する。教科書表紙見返しの国名地図によって、一行の通行した国々を確認する。国名と都道府県名との対比は、古文学習のうえで必要な知識となる。

【評価】歌を中心とする物語の構成を踏まえて、場面を追って、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えているか、音読により、確認する。

❷重要古語のうち、「八橋」「かきつばた」「都鳥」などは図版での提示がよい。教科書の図版、写真を活用されたい。

【評価】我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、語感を磨き語彙を豊かにしているか、ペーパーテストにより、確認する。

・古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや、古典特有の表現などについて理解しているか、ペーパーテストにより、確認する。

❸現代語訳は、一語一語を丁寧に押さえながら全体の筋や内容が把握できるように工夫させ、そのうえで、物語としての展開を読み取っていく。

【評価】文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解しているか、現代語訳により、確認する。

・古典の世界に親しむために、作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解しているか、ペーパーテストにより、確認する。

・登場人物の行動や心情について、また、夢についての古人のものの考え方が理解できたか、感想をノートにまとめさせて発表させることにより、確認する。

❹和歌の修辞は、教科書の脚注を活用する。また、詩歌編の和歌の学習と関連をもたせられるとよい。

【評価】言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解しているか、確認する。

・枕詞や序詞、掛詞、縁語などの我が国の言語文化に特徴的な表現の技法とその効果について理解しているか、確認する。

・時間の経過による文字や言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解しているか、

確認する。

■ まとめと発展

学習活動のポイント

❶「から衣」「駿河なる」「名にし負はば」の三首の歌に共通する心情を順を追って考える。思判表B(1)エ 主態

→「言語活動」1

❶三首を並べてみて、それぞれに共通して読み込まれているものを探し出す。「つま」や「人」が出てくるわけだが、それらがどのような状況のもとに、男の胸に浮かんできたかを考えさせる。行く先々での情景に触発されて、男の心は「都」とつながっていくことを読み取らせる。

【評価】作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めているか、折句などの表現技巧、詠まれている男の心情などの理解を深め十分に鑑賞できたかを、歌についての感想を書かせることにより、確認する。

・進んで昔の人の恋のあり方について理解し、歌物語に親しみ、「ば」の用法を理解し、学習課題に沿って、「から衣」「駿河なる」「名にし負はば」の三首の和歌に共通する人物の心情を考えようとしているか、分析する。

指導上の注意点と発問例

● 六〇ページ

問 **男が都を離れて旅立つ理由について、**
[中]**本文に即して説明せよ。** [易]**本文中から抜き出せ。** 1 2

答 2 1自分を必要のない人間だと思い、別の場所でやり直そうと考えたから。2身を要なきものに思ひなして

問 **「身を要なきものに思ひなして」（11行目）について、**
[中]**「思ひなす」の「なす」を文法的に説明せよ。** 1
[難]**「思ひなして」には、男のどのような心情が表れているか。** 2
[中]**どのように思ったというのか。** 3

答 3 1動詞の連用形に付いて、意識的、作為的にする意を添える補助動詞。2そう思う必要はないのに、「あえて思う」という意識的、作為的な心情が表れている。3自分を必要のない人間と思った。

補 自分自身をそのように見なすデカダンスの気分をたたえている。物語としては配列上、「芥川」で盗み出そうとした女性に失恋したため、都にいても仕方がないと思ったような編まれ方になっているが、官人として行き詰まりを感じた、などと諸説ある。

語句の研究

● 六〇ページ

11昔、男ありけり　「昔」は、説話や物語の冒頭の常套用語。「宇治拾遺物語」「竹取物語」などでは「今は昔」という語句であった。この段の「男」も在原業平のことだとされる。藤原長良の娘高子（二条后）との恋に破れて東国に流浪したと伝えられ、「東下り」はその折のことだと説かれる。物語の配列的に失恋が原因ととれるようになっているが、行く先々で都に残した恋しい人のことを歌に詠んでいるので、失恋を原因とするのはおかしいとして、官人としての挫折感からとする説もある（片桐洋一）。「けり」は伝承回想の過去の意。

11身を要なきものに　「要」は原文「えう」。異本のように「ようなきもの」であれば「用」の意となる。また一説「益」「役」の意とするが、それには仮名遣いが「やう」とあるべきである。「に」は直後の「思ひなす」という知覚動詞の内容を表す格助詞。

11思ひなして　「なす」は意識的、作為的にする意を表す補助動詞。「思ひなす」は、あえてそう思ってしまう気持ちを表す。「思い込む、決めつける」。

11京にはあらじ　「には」は場所を表す格助詞「に」に、係助詞「は」が付いて強調している連語。

12求めにとて行きけり　「求めに」は「求めに（行かむ）」の意。「とて」は「京にはあらじ、東の方に住むべき国求めに」を受ける。

12もとより　「もちろん」の意であれば「ひとりふたりして行きけり」に掛かる。男がたった一人で行ったのではなく、連れがいたのはもちろんだということになる。「以前から」の意であれば「友とする」に掛かる。自分を必要のない人間だとする失意の中で都を後にするのに、「もちろん数人で」では不自然なので、ここは「以前から」の意とみるほうが妥当であろう。

12ひとりふたりして　「して」はサ変動詞「す」の連用形「し」に接続助詞の「て」が付いて一語化したもの。「す」はもともと他の動詞の意を含んで用いられることの多い動詞であるが、「て」と結び付いて次第に動作性を失い、「して」の形で格助詞および接続助詞となった。ここでは格助詞で、動作を共にする相手を表す用法。

問「東の方」（11行目）の「東」はどこを指すか、「京」（11行目）と対比させて具体的に説明せよ。

答 京から見て東の方角の意で、逢坂の関（現在の滋賀県と京都府の境にあった関所）より東の地方を指す。一般に「東国」とも言い、関東地方、長野県方面をも指す。

問「東の方に住むべき国求めに」（11～12行目）の後に省略されている表現は何か。

補答 行かむ。
省略される部分はおおよそパターンが決まっていることに気づかせる。普通は前後に同様の表現があって、省略しても想像がつく述語を省略する。

問「住むべき国」（12行目）とは、男にとってどのような所か。

答「住むにふさわしい土地」。すなわち傷心の男の気持ちを癒してくれるような別の土地。

補「身を要なきものに思ひなして」に注意させる。「要なきもの」でも受け入れてくれる土地である。

問「とて」（12行目）で受けている部分は、どこからどこまでか。

答 京にはあらじ、東の方に住むべき国求めに

問「もとより」（12行目）を「もちろん」と考えた場合と、「もとから」と考えた場合とで修飾関係はどのように変わるか。

答「もちろん」の場合は「ひとりふたりして行きけり」に掛かり、「もちろん一人ではなく」の意になり、「もとから」の場合は「友とする」に掛かって、「もとから友人であった」の意となる。

● 六一ページ

問「おもしろく咲きたり。」（3行目）とは、どのように咲いているのか。

答 美しく咲いている。

問「句の上に据ゑて」（5行目）とは、具体的にどのようにすることか。

答「かきつばた」という言葉を五七五七七のそれぞれの最初の一字に詠み込むこと。

問 右のようにして詠むことを何と言うか。

答 折句。「語句の研究」参照。

問答「から衣」（8行目）の歌に見られる修辞上の技巧をあげよ。

答 折句・枕詞・序詞・掛詞・縁語。

補 以上の修辞を駆使して、しかも即興で詠んだというところが手柄となっている。

問「はるばるきぬる旅をしぞ思ふ」（9行目）とあるが、旅をどのように思ったのか。

答 つらく悲しいものと思った。

問答「から衣」の歌に「みな人」（10行目）が「涙落とし」（10行目）たのはなぜか。

答 技巧のすばらしさもさることながら、都を遠く離れて望郷の念を詠んだその歌の内容

---

13 三河の国　現在の愛知県の東部。「三川」、「参河」とも表記する。

13 八橋　愛知県知立市内に、八橋山無量寿寺など、その遺構とされる所が数か所ある。

14 水行く川の蜘蛛手　ここでは、川が幾筋にも流れているさま。「蜻蛉日記」下巻に、「帰るさの蜘蛛手はいづこ八橋をふみみてきとも何頼むらむ」という歌がある。

● 六一ページ

2 乾飯　携帯に便利なように一度炊いた飯を干して乾燥させた飯。干し飯。乾飯でなくても、旅行用の糧食をこのように言った。この場合は後に「ほとびにけり」とあるから、乾飯だったと分かる。

3 かきつばた　アヤメ科の多年草。燕子花。杜若。花弁が燕の尾に似て長くしなやか。池沼や湿地に生じ、夏、紅や紫・白などの花を咲かせる。あやめに似ているが花も葉もあやめより大型。「万葉集」などでは美しい恋人を表す比喩として詠われている。

5 句の上に据ゑて　短歌の五七五七七のそれぞれの句頭に「か・き・つ・は・た」の五文字を置いて詠み込むこと。このような修辞技法を「折句」という。「古今和歌集」（巻十・物名）に「朱雀院の女郎花合の時

に共感したため。

補 技巧的に工夫されていることもあって、感情的に抑えられているものの、そこに詠み込まれた都にいる恋しい人への思いが、目の前のかきつばたと相まって、同じように恋しい人を都に残してきている人々の涙を誘ったと言える。「歌の力」というものの一つの姿である。

問 **「ほとびにけり」（11行目）は、何が、どうなったのか。**

答 食べるために取り出していた乾飯が、人々の涙で濡れてふやけてしまったこと。

問 **「行き行きて」（12行目）と「行く」という動詞を二つ重ねて用いた効果を述べよ。**

答 同じ動詞の連用形を重ねることで継続・進行の意味を表している。

補 どんどん行くという意味で、「行く」の強調になっている。男が都を恋しく思いつつも、それでも進んで行く様子がうかがえる。

問 **「いと暗う細きに…」（14行目）以下に描写された道は、どのような様子か。**

答 道の両側から樹木の茂った森が迫っている様子。

問 (1)**「いと暗う細きに」（14行目）と、(2)「すずろなるめを見ることと思ふに」（15行目）の「に」について、**

A(1)と(2)の「に」の違いを文法的に説明せに、をみなへしといふ五文字を句のかしらにおきてよめる」として「をぐら山みねたちならしなく鹿のへにけむ秋をしる人ぞなき」という紀貫之の歌がある。このような「折句」の一種には、各句の初めと終わりに事物の名や語句を詠み込む「沓冠（くつかむり）」と呼ばれる複雑なものもある。「合薫物（あはせたきもの）すこし」という言葉を詠み込んだ「あふさかもはてはゆきのせきもゐずだづねてとひこきなばかへさじ（逢坂もはては往来の関もゐず尋ねて訪ひこ来なば帰さじ）」（「栄花物語」巻一・月の宴）という例などがある。

8から衣…　この歌には次のような修辞上の技巧が施されている。(ア)折句＝短歌の、五七五七七のそれぞれの句頭に「か・き・つ・は・た」の五文字を置いている。(イ)枕詞＝「から衣」は「着」の枕詞。(ウ)序詞＝「から衣着つつ」は「衣服が、着ているうちにのりが柔かくなって、身体になじんでくる」意の「褻（なれ）」の序詞。(エ)掛詞＝「なれ」は、馴れと褻れ、「つま」は、妻と着物のへりの部分を表す褄、「はるばる」は、遥々と張る張る、「き」は、来と着。(オ)縁語＝「褻れ」「褄」「張る」「着」は「衣」の縁語。身につけて徐々に身体になじんでいく衣で、身近に慣れ親しんだ妻（恋人）やその温もりを表現し、そこに美しい恋人を表す「かきつばた」を詠み込んでいる。

11ほとびにけり　「乾飯」が、人々の落とした涙によって、水気を含んでやわらかくなったことを言う。乾飯は、食べるとき水でふやけさせるのだが、ここでは、涙でちょうどよい具合にふやけたという洒落。

12駿河の国　現在の静岡県の中・東部。「伊勢物語」の異本の一つ、小式部内侍本には、「駿河の国宇津の山口にいたりて」とある。

12宇津の山　現在の静岡県藤枝市と静岡市との境にある宇津ノ谷峠。「平治物語」にもその名が見える。

14いと暗う細きに　「いと暗う細きに」「すずろなるめを見ることと思ふに」の二つの「に」は、前者が添加の意の格助詞で、「暗く細いだけでも心細いのに、そのうえ、蔦、楓までも茂っていて、いっそう心細い」という意を表している。後者は、単純接続の接続助詞で、「すずろなるめを見る（思いがけなくつらい目に遭う）ことだと思っていると」の意。

● 六二ページ

1修行者会ひたり　「修行者に会ひたり」と

よ。

答 B(1)と(2)をそれぞれ現代語訳せよ。
A(1)添加の意の格助詞　(2)単純接続の接続助詞　B(1)道が暗く狭いうえ、(蔦、楓までも茂っていて)　(2)思いがけなくつらい目に遭うことだと思っていると

問 「すずろなるめを見る」(15行目)とは、どのようなことか。

答 思いがけなくつらい目に遭うこと。

問 「修行者」と「会ひたり」(1行目)は、文法的にどのような関係にあるか。

答 「修行者」が主語、「会ひたり」が述語。

補 古典では、人に偶然会ったときには、相手を主体にして表現した。

●六二ページ

問 「かかる」(1行目)は、本文中のどの部分を受けているか。

答 いと暗う細きに、蔦、楓は茂り

問 「かかる道」(1行目)とはどのような所か。

答 「かかる」は、具体的には「いと暗う細きに、蔦、楓は茂り」を受け、都から離れた「もの心細」い山道。

補 「修行者」にとっては思いがけない出会いであった。その気持ちが「このような」という語として表れている。

問 「言ふを見れば」(1行目)の(1)「言ふ」、(2)「見れば」の主語は、それぞれ誰か。

答 (1)「言ふ」　(2)男

問 ●「その人」(2行目)とは、男にとってどのような人か。

答 都に残してきた恋しい人。

問 四首ある歌のうち、「その人」(2行目)のことを詠んだ歌の初句をあげ、それぞれ歌の中で「その人」を何と呼んでいるか答えよ。

答 「から衣」＝つま　「駿河なる」＝人　「名にし負はば」＝わが思ふ人

問 「駿河なる」(3行目)の歌に用いられている修辞上の技巧を説明せよ。

答 「駿河なる宇津の山べの」は、「宇津」と「うつつ」の同音を利用して、「うつつ」を導く序詞になっている。

問 「うつつにも」(3行目)を受けるのはどの文節か。

答 あはぬなりけり

補 「うつつ」は現実。遠く旅をしてきた今、現実に会えないのは当然としても、「夢ですらも」と続く。

問 「うつつにも夢にも人にあはぬなりけり」に込められた心情は、どのようなものか。

答 恋しく思う人がすでに自分のことを忘れてしまったのではないかと嘆く心情。

問 なぜ前問のような心情であると言えるのか。

答 当時、夢の中に登場する人は自分のことをしがちだが、「に」を省略する例はないというのが通説なので、「修行者」が主語で、「会ひたり」が述語。人に予期せず偶然会ったときは、相手を「主」とする言い方をして、相手を強く意識した心情を表現した。例として、「(倭建命が)その山に登りましときに、白き猪、山の辺に会へり」(古事記)など。「修行者」は回国修行の行者。仏道修行のため、諸国を巡礼した。

1かかる道は、いかでかいまする　「は」は他と区別して取り立てて強調する意の係助詞。ここでは、修行者の意識に、「こんな辺鄙な道にどうしてこんなお方が」という気持ちがあって、「かかる道」を初めに出したのである。「いまする」という尊敬語を用いていることから、男は高貴の人で、東下りなどする人ではないはずだという余意がうかがわれる。「いかでか」は、理由や手段を問う副詞「いかで」に疑問・反語の係助詞「か」がついた連語。ここは「どうして…か」という疑問を表す。「いまする」は、「あり・居り・行く」の尊敬語「います」の連体形で、「か」の結び。「います」は上代に多く用いられ、古くは四段または下二段活用の動詞であったが、中古

思っていると解されており、「夢にもあはぬ」ことは「自分のことを忘れた」と解釈できるから。

問　**「時知らぬ山」（5行目）とは、どのようなさまを言ったものか。**

答　夏なのに雪を頂いている山の様子。

補　時節を知らない山。季節的な常識に外れた山の姿。

問　**「ここ」（6行目）とは、どこのことか。**

答　京（都）

補　話の「語り手」や「聞き手」のいる場所が物語の場面に登場してしまっている。

問　**「思ひやれば」（9行目）とは、何を「思ひや」るのか。**

答　これまでの旅のさまざまなこと。

補　この部分は、次の「限りなく遠くも来にけるかな」という会話、もしくは心内語の一部とも考えられる。「語句の研究」参照。

問　**「わび合へる」（10行目）とは、具体的にどのようにしていることですか。**

答　途方もなく遠いところに来てしまったことを、皆で互いに嘆き合っていること。

問　**「日も暮れぬ」（10行目）の「ぬ」を文法的に説明せよ。**

答　強意（確述）の助動詞「ぬ」の終止形。完了とする解釈もある。なお、打消の助動詞の場合は連体形であるので、ここは当てはまらない。

の和文ではサ行変格活用となった。よって、ここはサ行変格活用とする。

1見し人なりけり　「し」は直接体験の過去「き」の連体形。よってこの文は男の立場で書かれていると考え、「けり」は詠嘆の意でとった。「（なんと）見知った人であったよ」。また、後の「限りなく遠くも来にけるかな」（六二・9〜10）も同様に考え、この「けり」も詠嘆とした。

2京に　都に向けて。下の「とて」に掛かる。一説に、「つく」に掛かるとする。

2その人　前の歌の「つま」を指す。

2つく　伝えたり届けたりするよう頼む。言づける。「竹取物語」に、「船の帰らむにつけて賜び送れ」とある。

3駿河なる…　「うつつにも」は「夢にも」と対立関係で、下の「あはぬ」に掛かる。現実に逢えないばかりか、夢の中でも逢うことができないと訴え、「その人」がすでに自分を忘れてしまったのではないかと嘆く。当時は、相手が自分を思っていると、自分の夢枕に相手が出てくるものだという考えがあった。宇津の心細い道を通った男は、都のことを思い切るのでなく、逆に妻（恋しい人）に自分への気持ちを問いかけている。道を進むにつれ、都の思い人への恋しさが募ってきていることがうかがわれる。

4つごもりに　「つごもり」は「月籠り」のつづまった形。月末。晦日。「月立（つきたち＝ついたち）」の対立語。「に」を逆接確定の接続助詞とする説もある。

5時知らぬ…　「雪の降るらむ」の「らむ」は現在の原因推量の意を表す。「いったい今をいつだと思って、あんなに鹿の子まだらに雪が降り積もっているのだろう」。「鹿の子」は「鹿」の愛称としても用いられる語句。「鹿の子まだら」は、鹿の毛の斑点のように、全体が茶褐色で、それに白い斑点が散在するさまを思い浮かべて、富士の峰にかかっている白雪の状態をいったもの。

6比叡の山　比叡山は京都府と滋賀県との境にある。

7塩尻　海浜で製塩するために、海水を汲んで浸した砂を乾かして集め、円錐形に積んで日にさらすものをいう。乾かすと塩が結晶化し、白くなる。富士の形の美しさと、その頂きの雪からの例えと考えられる。

2思ひやれば　「都を旅立ってからの日数・行程を振り返ってみると」。「やる」は、時

はまらない。「日も暮れ」のような自然現象としての動作・作用の完了には「ぬ」が、人為的・意図的動作の完了には「つ」が用いられることが多い。

問 **補** **答** **問** **「思ふ人」（11行目）とは、どのような人か。**

恋しく思う人。愛する妻。

「語句の研究」参照。

答 **問** **「なきにしもあらず。」（11行目）という語句の成り立ちを説明しなさい。**

「なき」は形容詞「なし」の連体形、「に」は断定の助動詞「なり」の連用形、「しも」は強意の副助詞、「あら」はラ変動詞「あり」の未然形、「ず」は打消の助動詞「ず」の終止形。「あり」の意を、「なきにあらず」と二重否定の形で強調し、さらに「しも」で強めた表現。

問 **答** **問** **「白き鳥の」（12行目）の「の」を文法的に説明しなさい。**

同格の格助詞

答 **問** **どのような「鳥」（12行目）か。**

体が白く、嘴と脚とが赤い、鴫の大きさの鳥。

問 **答** **「『これなむ都鳥。』」（14行目）の「なむ」に込められた「渡し守」の気持ちを答えよ。**

「これが（有名な）都鳥だよ。」と誇らしく思う気持ち。

問 **名にし負はば」（15行目）の「し」と同じ**

空を問わずある動作の遠くまで及んでいく意の補助動詞。ここは、国境となる川岸で、それぞれが改めて都からの距離を思ったのだろう。この部分を会話の一部とすると、読点の位置は「その川のほとりに群れゐて、思ひやれば、限りなく…」となり、人々とこれまでの旅を振り返って語り合っている意となる。大きな川を前に、ますます都から遠ざかる心細さと不安感が入り交じった気持ちを共有していると考えられる。

8 武蔵の国　現在の埼玉県・東京都および神奈川県の一部。

8 下総の国　現在の千葉県の北部と茨城県の南西部。

9 すみだ川　現在の東京都東部を流れる隅田川。当時は武蔵の国と下総の国との境であった。「墨田川」、「角田川」、「住田川」とも表記される。

10 わび合へるに　「合ふ」は「互いに…する」の意を添える補助動詞。

10 日も暮れぬ　ここは、確実に起こること（日が暮れること）を強調しているとして、「ぬ」を強意（確述）の意とした。日が暮れてしまう、という完了の意でとる解釈もある。

11 なきにしもあらず　「あり」の意を「なきにあらず」と、二重否定の形で強め、さらに「しも」で強めたもの。大きな川を渡ることで、都との断絶を改めて感じ、都の妻（恋人）と二度と会うことはないかもしれないという思いが強まったのだろう。

12 さる折しも　「さる」は「みな人ものわびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず」を受ける。副詞「さ」＋動詞「あり」から成るラ変動詞「さり」の連体形が連体詞に転成したもの。「折しも」で「ちょうどそのとき」の意。「都に残してきた思い人を思い出していたちょうどそのとき」。

12 白き鳥の、嘴と脚と赤き、鴫の大きさなる　「白い鳥で、嘴と脚とが赤い、鴫の大きさである（鳥が）」の構文。「白き鳥の」の「の」は同格を表す格助詞。連文節「白き鳥の…大きさなる」は主語であって、「遊びつつ魚を食ふ」が述語。

12 鴫　シギ科の鳥の総称。くちばしと脚が長く、水辺にすむ。

14 これなむ都鳥　下に結びの語として「なる」を補う。渡し守の誇らしげな気持ちを含む。「都鳥」はゆりかもめのこと。カモメ科の小形の鳥。冬の渡り鳥で水辺に群棲

ものを含む文節を、他の歌の中から二つ抜き出せ。

答 ・つまし　・旅をしぞ

問 **「いざ言問はむ」とは、何にどのようなことを「問」うのか、分かりやすく答えよ。**

答 都鳥に、私の恋しく思っている人は無事かどうかということを問う。

● 六三ページ

問 **「舟こぞりて泣きにけり」（1行目）とあるが、それはなぜか。**

答 「男」の詠んだ歌に、同行の人々は同じ思いに心を打たれたからである。

補 都を捨てた理由は同じではないとしても、それぞれ妻を残して遠い土地まで来ているという共通点が一行の男たちにはあり、それが人々の共感を呼んだのである。

問 **前問の理由となっている部分を本文中から探し、その初めと終わりの五字を抜き出しなさい。（句読点を含む）**

答 みな人もの〜もあらず。（11〜12行目）

する。

15 名にし負はば…　二句切れ。「わが思ふ人」は、「都の思い人」。「言問はむ」は、「都鳥への問いかけ」。「ありやなしや」は、「無事でいるかどうか」。思い人の愛情を疑った「駿河なる」の歌からさらに進んで、その人の息災すらも不安に思うという思慕の高まりと、それを鳥に尋ねるしかないほど遠くに来てしまっているということを表した歌。この歌は古来秀歌とされ、引き歌としても随所に用いられている。「都鳥」と言えば隅田川に限られるようになったのも、この歌が知られたためである。

● 六三ページ

1 舟こぞりて泣きにけり　主人公の「男」が都にいる妻（思い人）を恋い慕う歌を詠んだので、舟の人々は同じ思いに心を打たれて泣いたのである。舟の人々は、前文に「みな人ものわびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず」と書かれているように、「男」と同様、それぞれ都に妻を残して来ていた。

鑑賞

東海道を下る旅を主題にするが、その旅は交通の不便による苦難も多く、「身を要なきものに思ひなして、京にはあらじ、東の方に住むべき国求めに」行く旅であることに、まず注意される。自分を京では生きていても仕方のない余計者と思い込む男の心は、挫折感・疎外感に満ちている。男が、僅かに、自分の生きる場があるかもしれないと期待した東国は当代の都人にとっては全くの辺境の地であった。

「貴種流離譚」という話型を用いて男のそうした心情が描き出されているが、そこには近代人にも共通する苦悩というものも読み取れるのである。旅は、三河の八橋、宇津の山、富士山、そして隅田川へと奥深く続けられるが、あるのは常に思い切って捨てて来たはずの故郷、京とともにある男の姿である。何を見ても脳裏に去来するものは、慣れ親しんだ妻の姿であり、見慣れた都の風景である。旅は、男の生きる場所が京のほかにはないことを痛切に思い知らせるものとしてあった。それでも男たちは「なほ行き行きて」隅田川に至る。大きな川の、その川辺に立つと「限りなく遠くも来にけるかな」と旅のわびしさが胸に迫る。荒涼たる風景、そこへなおも旅へと追い立てる渡し守の叱声がとぶ。都人の見も知らぬ世界にあって、この川を渡れば都と決定的に離れてしまうという不安やためらいの中、悄然と肩を落とす一行の目に、その時一羽の白い鳥が映る。その名は都鳥。ここでは、都鳥という実体は何の関係もない、ただ音だけによって故郷とつながるその鳥の名が旅愁に耐えてきた人々の心の鬱屈に火をつける。

四首ある歌のうち三首は、進むに従って、その都を遠く離れる男の旅愁と都恋しさの深まりを、極めて自然に、かつ具体的、感動的に歌っている。「から衣」の歌は、折句ということもあり、全体に理知的な抑制から出る美しさがあり、激しい感情は抑えられているが、次の「駿河なる」の歌には、せめて夢にと現れてもらって女の愛情を確認したいという、切なく求める情熱の強さが感じられる。最後には武蔵の国の隅田川に到達するのであるが、ここでは船頭の無情が契機となって、旅愁・望郷の最高潮を示すことになる。その高まりに「名にし負はば」の歌の悲愁にみちた呼びかけがあって、この物語は終結する。

歌物語は、感動や情緒の中心を歌によって描き出す物語のことであるが、文は単なる歌の「詞書」でもなければ、また歌の中の挿入でもなく、実に歌は、文のためにあり、文は歌のためにあって、いわば、「文」と「歌」は同一線上にありながら、しかもそれは対立・対等の関係でなく、両者融合、一体の姿をとっている。非凡な構成と語りがうかがえる段である。